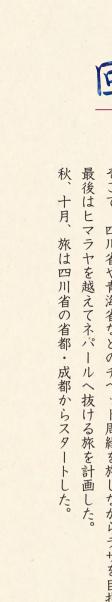
回想紀行

2000年

東部のカム、アムドと呼ばれる地域にはまだ行ったことがなかった。 チベットには縁があって何度か旅していたが、 2000年 チベットをめぐる旅に出た。 省や青海省などのチベット周縁を旅しながらラサを目指し

後藤ふたば [文・写真]



時間を聞いている。答えは「明日の朝」 昼」。また別の乗客が、運転手の妻に 到着時間を聞いている。答えは「明日 さてどれが正解なのか、 時間を聞いている。答えは「明後日の の夜」。別の乗客が、運転手の助手に が大幅に違うらしい。乗客が運転手に の山を越えるか迂回するかで所要時間

ダンプは粛々と山道を進み始め、 プだ。これに乗るらしい。差し出され て蛍光灯が灯るトンネルに入った。 た手をつかんで高い荷台によじ登ると い真っ暗な山中で、全員荷物を持って 天井には「絶対に完成するぞ、二郎 が近づいてきた。見れば巨大なダン ろざれる。と、遠くからヘッドライ

あっけ無いような不思議な気がした。 成都を出てまだ半日も経っていない ベット高原の縁に入ったのだ。チベッ に雲が晴れた。四川盆地を出て、チ に照らされた。 られていた。トンネルは工事中だった。 い土地だ。それが二郎山を越えた途端 いて吠える」と言われるほど曇天の多 こう側に抜けると、煌々とした月の光 本来走れるはずのない場所を、資材の トはもっと遠くにあると思っていた。 山を避けながら延々と進み、やがて向 山トンネル!」というスローガンが飾 四川は昔から「四川の犬は太陽に驚



上には二郎山という難所があり、こ

バスは満員だった。ルー

かう寝台 の入り口

同じ部屋で生活を共にする若い僧侶と小坊主君たち(四川省朗木寺)

たまま運ばれてゆく。やがて車が停ま

月明かりの下を私たちは荷台に立っ

かったのは運転手の妻だった。 に向かう。康定到着は午前5時。

びえる険しい山が、常にどこかに見え

少し暗く殺伐と感じられ、

早々に東

カムバの町と砂嵐 カムの旅

徳格までだ。 おらず、行けるのは四川省側最後の町、 サに至る。残念ながら外国人はこの ベット自治区の要衝チャムドを経てラ 徳格と進む道は川蔵北路と呼ばれ、チ から西へ、 徳格行きのバスは翌日の発車だった バ・チベット族もよく見かける。こ ベット族が多く、 康定は中心に川が流れる谷間の町だ でのチベッ 炉霍、甘孜、 刀を腰に挿したカ 人りは許可されて

までは舗装道だったが、 もまた早朝発で徳格を目指した。 広がる僧房群がみごとな炉霍泊、 きなり峠道に差し掛かり、 早朝に走りだしたおんぼろバスは、 ら上って行く。 徳格までは1泊2日。初日は山腹に りでめまいがするわけだ。 ルと看板が出ていて驚いた。 峠を通過する時に4290 けっこう上るなと思い そこから先は あえぎなが 翌日

砂利道になった。 車窓からは、 空を突き刺すようにそ

> 低山と丘陵地の繰り返しだ。 だすほどだ。 が繰り返されるので、疲れた頭は「あ また峠にさしかかる。 ばらく走る。 上り、下る。 ているが、道はそれほど険しくはない れ、ここさつき通った?」などと考え 馬尼干戈では、 流れが細くなってくると 下りきると川に沿ってし 同じような風景 時々峠を

僚を、土地のカムバ族が表敬訪問する 眼光だった。 逸らそうとしたが逸らせない、強烈な えて乗り込んできた官僚と目が合った。 いよう丁 挿して油断なく、かつ相手を刺激しな 身を包み、よく光る銀色の短銃を腰に い漢族の官僚は、仕立てのよい制服に 部劇の1シーンのようだ。迎え撃つ若 真ん中にずらりと立っている姿は、 場に遭遇した。砂ぼこりの中、 服で正装したカムバ族たちが長老を 」 寧に対応していた。 儀式を終 同乗していた公安官 チベッ 西

ついたような小さな町は、 ト動乱の激戦地だった。谷間にへばり るのをよく見る。このあたりはチベッ つけながら、 濃くなり、 徳格まで来るとチベット色がますま 肩で風を切って歩いて カムバ族が腰の刀を見せ そのせいか

と思い、 れた。 め切った町に着いたのは夜の9時過 は大騒ぎだ。家々が嵐避けの雨戸を閉 た。やがて車内にも砂が侵入し、乗客 乱舞するのが砂だと知った時は驚 分だが仕方ない。宿泊予定の甘孜に着 点張りで、私は砂嵐の中に放り出さ り引き返すのは何だか損をした気 やがて砂嵐になった。最初は雪か バス駅併設の宿は外国人はダメ 時間ほど前から風が強くなり ヘッドライトに照らされて

をつき、顔を下に向けて、 前後左右上下斜め、容赦なく吹き付 の中心と思われる方向に進んでいる てくる強烈な砂嵐に、 呼吸もままならない。 目も開けられ 建物の壁に なんとか

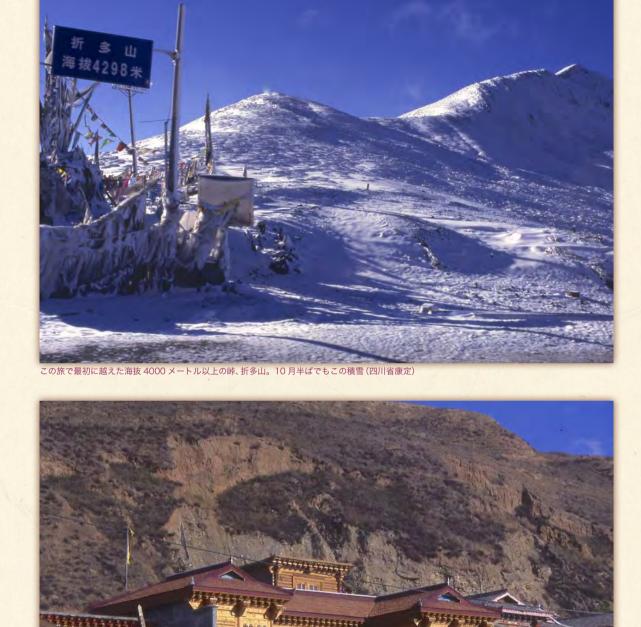
回中に私を見つけたのだと言う。 けてくれたのは3人の若い兵士で、 にして宿まで連れて行ってくれた。 元で怒鳴られ、「ホテル」と叫び返す と相手はうなづき、私を引きずるよう 「なにをしている、どこへ行く」と耳 どんと人に突き当たる。

引き返すことにした。 戻るバスは康定行き。来た道をそっ 0

チベット文化圏は広大で、現在はいくつかの行政区に分かれている。 おおまかには、カムと呼ばれる東部は四川・雲南両省に、アムドと呼 自治区である。自治区への旅行には許可が必要だが、他のチベットエ リアには比較的自由に出入りできる。

②康定 ③炉霍 ④甘孜 ⑤馬尼干戈 ⑥徳格 7紅原 ⑧朗木寺 ⑨夏河 ⑩西寧 ⑪格爾木 ②ラサ ③シガツェ ⑭ラツェ ⑮カトマンズ





ベットには草木などない印象があるが、カムは木材が豊富でチベット式ログハウスが多く見られた(四川省甘孜)

計

回想紀行

出るなよ」と何度も念を押して去って

町は静かで美しく、 だった。嵐が何もかもさらっていった ド方面に進路を変えた。 えのある道を走り、途中の八美でアム ようだ。昨日と同じバスに乗り 宿を出ると降るような星空 昨夜のことが嘘の

大草原を進む一

やかさだった。 らぎに落ちる木漏れ日が柔らかい、チ カムからアムドへと、 まだ木々の緑が濃く、 ージからはだいぶ遠い穏 町の周辺は標高が 川に沿って北 せせ

人の地が続く。紅原、 点在しているくらいで、 町から町が遠く、その間にはなにも 山の中腹に白い壁の民家 若爾蓋のあた どこまでも

にやっと笑って拳を突き上げてみせた。 片方はまだ少年だ。手を振ってみると、 追いつくと、 男が二人、バスを追いかけて来ていた。 で外を見ると、馬を駆るチベット服の 夕闇が迫るころ、他の乗客が騒ぐの うまく並走してみせる。

やがて二人はすっと道路から離れ、 原の中に吸い込まれていった。

他にはなにもない、とても静かで穏や にして以来、ぜひ一度と思っていたの ゆっくり羽を休めた。 調を崩していた私は、ここで五日ほど かな村だ。砂嵐以来咳が止まらず、 が実現した。宿と食堂とお寺はあるが、 が強い。数年前にここの噂を旅先で耳 で取り残され、結果としてチベット色 る。その小ささゆえにさまざまな意味 村には二つの寺があった。どちらも

気軽に撮影に応じてもくれる。 笑顔を向けてくれ、カメラを見せれば にでも行くのか連れ立って歩く僧侶と くり回る老人を追い抜いたり、 の右手に見ながら歩いていると、 プダウンのある巡礼道を、 をぐるりと回って祈りを捧げる。アッ 丘の斜面にあり、地元の人は寺の周囲 れ違ったりする。出会う お寺を自分 人は誰もが 買い物 10 つ

かのように雲が流れてゆくのだが こまでも青く、まるで何事もなかった た苦しい時代もあっただろう。 傷であったはずもなく、 長い歴史のなかで、この村だけが無 嵐に翻弄され 空はど

甘粛省との境に朗木寺という村があ



立派な羊皮のチベット服を着た老婦人たち。右側の人は手にマニ車を持っている(四川省朗木寺)

ない。時折、 は特に広大な草原地帯だ。

10年ぶりのラサ

休憩があっても何も食べられず、二日 時間留まるのは体に悪い。途中で食事 いたはずだが、それでもこの標高に長 険な移動だ。ある程度高所順応はして ながらラサに達する。二日がかりの危 6メートルの峠を最後に、 の峠を上って青蔵高地に至り、520 を出たバスは一気に4767メー は「助かった」と思った。 この夕方にようやくラサが遠望できた 爾木は海抜2800メー 朗木寺から夏河を経て青海省都・西 いでラサに向った。列車の終点の さらに列車とバスを乗り 高度を下げ そこ

落があったはずだが、美しい広場に 薄まった。ポタラ宮の下にはかつて集 がって多くの車が走り、チベット色は 変わっていた。ビルが増え、道幅が拡 予想はしていたが、ラサはずいぶん 十年一昔と言うが、

ル国境へ

勢の巡礼者でにぎわっていた。 ルという巡礼路は以前と変わらず、大 と、それを取り囲んで一周するバルコ それでも町の中心にあるジョカン寺 お香の

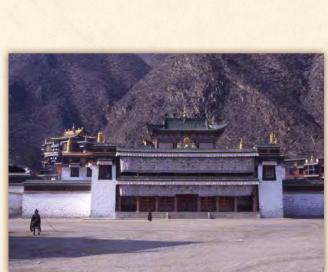
りには公共の移動手段がなかった。

晩までバルコルを回る。 小さな音。真言の呟き。 の人。巡礼たちが回すマニ車の乾いた に体を投げ出して聖地へ進む五体投地 ちこちで座り込んで休んでいる。地面 な皮のチベット服を着た家族連れがあ 人々は朝から

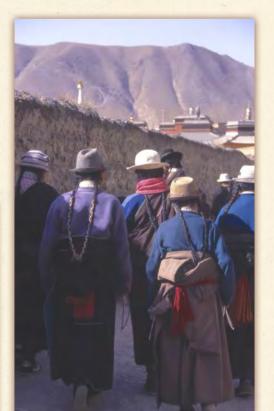
できた。 る。 譲ってもらったのだが、 作った人が売りに来たのを、そのまま ここは何ひとつ変わらないように思え 世界はずいぶん変わっているのだが そうして過ぎていく。この外側にある ベットうどんを食べる。ラサの1日は れたら茶館でミルクティ してまた歩き、休む。 彼らと同じ方向にゆっくり歩く。 バルコルの露店でチベット服を買っ 袖のない珍しい形で、 それもたぶん錯覚なのだろうが。 お腹が減ればチ いい買い物が -を飲む。 ちょうど そ

はラツェという町までしかなく、そこ からネパール国境までの320キロ余 ヤ・ハイウェイが結んでいるが、 バス

回想紀行



-ベット仏教黄帽 (ゲルク) 派六大寺院の一つラブロン寺 (甘粛省夏河)



ラブロン寺参道を歩く巡礼の女性たち(甘粛省夏河)



チベットの大河ヤルツァンポー。橋のない場所ではフェリーで対岸に渡る(チベット自治区タドゥカ)

ラックが見えた。そこが終点だった で眠くなるが、こっくりすると運転手が 月も終りに近い日の、 肩や腕を叩いてくる。「寝るな、何でも な振動を送り続ける未舗装の道を走り んだん標高が下がってきたなと思った 洗濯板のように削れて気が狂いそう いからしゃべれ、俺も眠くなるだろ」 たトラックに乗って走り続けた。満腹 つき、熱々のうどんをすすり、そして 前方に列をなして停車しているト ールの凍る峠を越え、だ

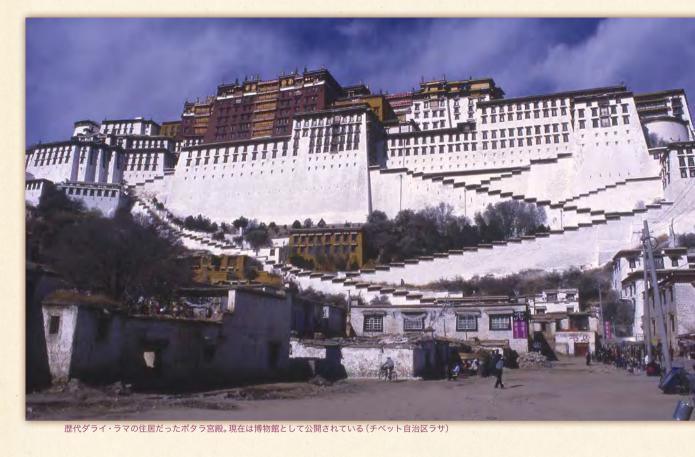
に食事をしていた。テーブルの上には 大勢の回族の男たちがにぎやか 男たちは揚げパンと なかに入 ンと盛ら

共にそれを食べている。

俺の面子が立たないだろうが」 客人にそんなところでパン食われちゃ がない?心配するな俺のおごりだ 食べていると、運転手のボスが声をか 「こっち来て一緒に食いな。 なに、 隅つこで

男たちに混じって骨付きの羊肉にかぶ お金もないの





付が変わるまで飯は食わな ない。どこかで食事休憩をするだろう 過ぎてもその気配がない。 んだよラマダン、わかる? 空腹で目が回りそう、 俺たち回族だからよ、今ラマダンな だから日

理由では仕方がない。 なのかもしれないが、

ラツェは街道の分岐点にある小さな町 途中シガツェを挟んでラツェに向った それでも多くの人が行き交う国境だ 何かしら手段はあるだろうと、 道端で待っていると、3台

に行き来しているそうだ。 な運転手は蘭州からネパール国境を常 ねてようやく折り合ったが、それを払 理を天にまかせて、 その日は朝からずっと何も食べてい た。出発は午後2時。 手席に収まり、 かし言い値が高い。ボスと交渉を重 トラックが連なってやって来た。聞 と私の所持金は残りわずかとなった。 ば国境行きで、乗せてくれると言う。 国境に向けて走り出 大きなトラックの 人の良さそう



バルコルの露店で装飾品に夢中の遊牧民(チベット自治区ラサ)

回想紀行

この旅から14年が過ぎ、チベットは大きく変わった。2006年に青蔵鉄道が開通し、それまでよりもはるかに多くの人と物が自治区に流れ込むようになった。鉄道をインドまで延伸する計画も進んでいる。チベットはもはや秋境ではない。

08年の四川大地震も忘れてはならない。この旅で私が通過したエリアも、大きな被害を 受けた。人々が被害から立ち直っていることを祈るばかりだ。

11年に、アムドとカムを再訪する旅をした。少し西寄りのルートを行ったが、道路がよくなり、バスも増え、行く先々では寺院の大改修工事が行われていた。漢族の尼さんにもたくさん出会った。チベット僧姿の漢族女性など、少し前なら考えられない話だ。

猛スピードで変わっていくチベットが、これからどうなっていくのかを見守り続けたい。 私は、ほぼ 10 年ごとにチベットを旅してきたので、次は2020年ごろに彼の地を訪れた いと思っている。

回想紀行

2000年 チベット縦断



商店の看板は漢語とチベット語の併記 (チベット自治区タマ)

